江戸繁昌
一松齋芳宗
へ13
2378
321

特
東8
2378
321

江戸栗毛

叙

鈍亭魯文校訂

奇なる哉妙なる哉怎麼此聰の鍔と題する稗史の滑稽洒落の中道を採り微細に穿入情は浮世の体の機関を筆に繰る趣向の其筆頭の功なる彼判板に空言なる巻を披閲の香昔の忽其場に絶倒するに腹の皮を撚あるべしと不後贅言序文しく可惜花の枝折故爲のことわりなること有て不言は此服なると兼好法師も言ましく

技倉の弥二馬は二駿あるも當らん幸先のよ

安政五晩秋

玄湖書

鶴亭秀賀誌

稗官者流の
腹稿成り〳〵硯命じて
大蛇と現ずと是此編
の發端開場虚の
虚より不可思議

三田の郷五郎
茨木童三郎
嶽舎姉おい福

坊面屋
弥二郎
兵工
旅客の
傭女の
於木偶

仙花
喜多利屋
北八

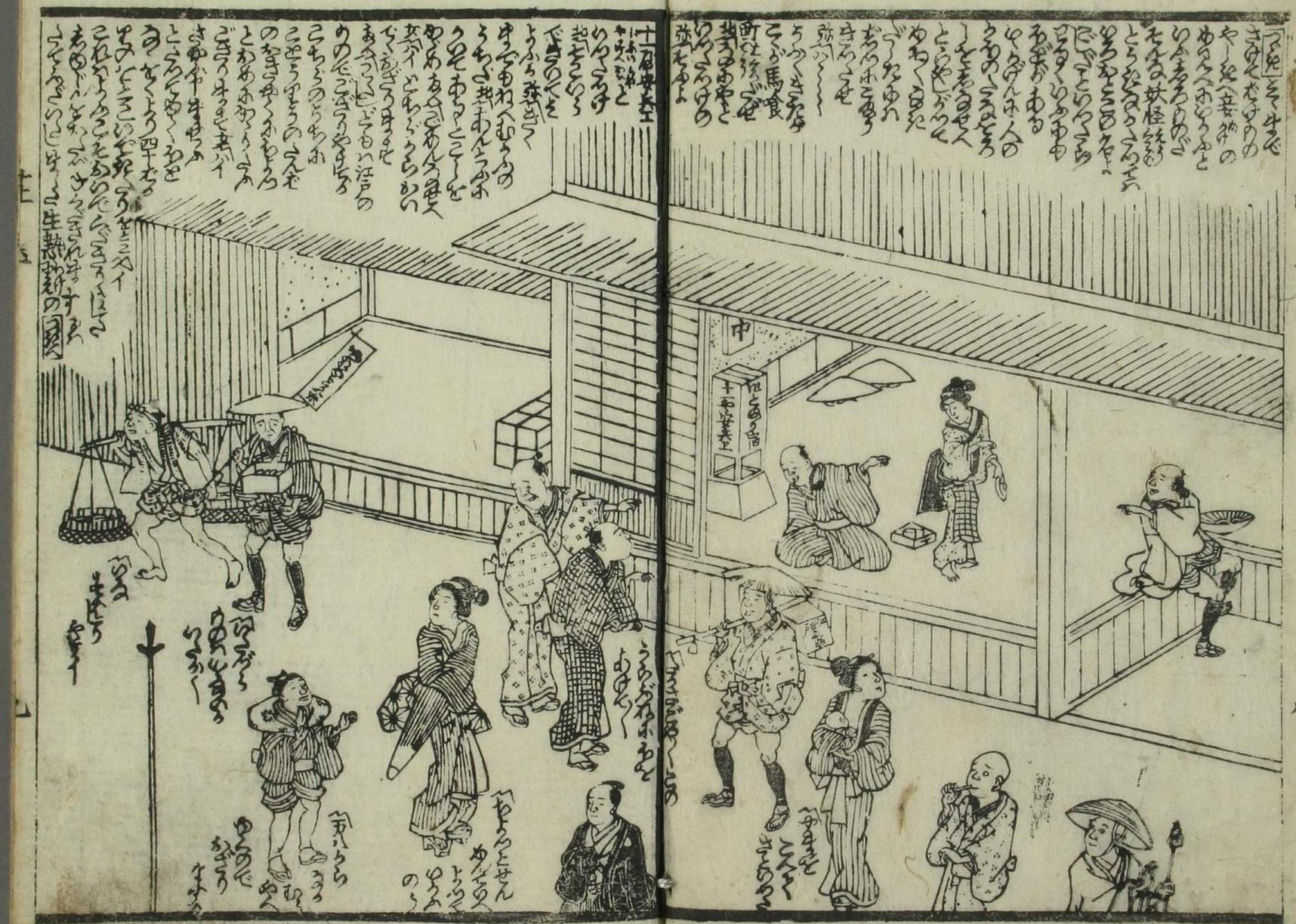
弥二郎が心の望

北八ゞ意の望

大當り
大出来
小栗實傳
初編二編
追々出板
定
一東海道
一板元三世
作者 勇亭主人
画工 歌川豊国
彫工 重蔵

月日
十二屋安兵衛
丹波国産人
馬喰町三丁目

弥
北



北
弥

曽文校芳宗画

万歳也

八文字

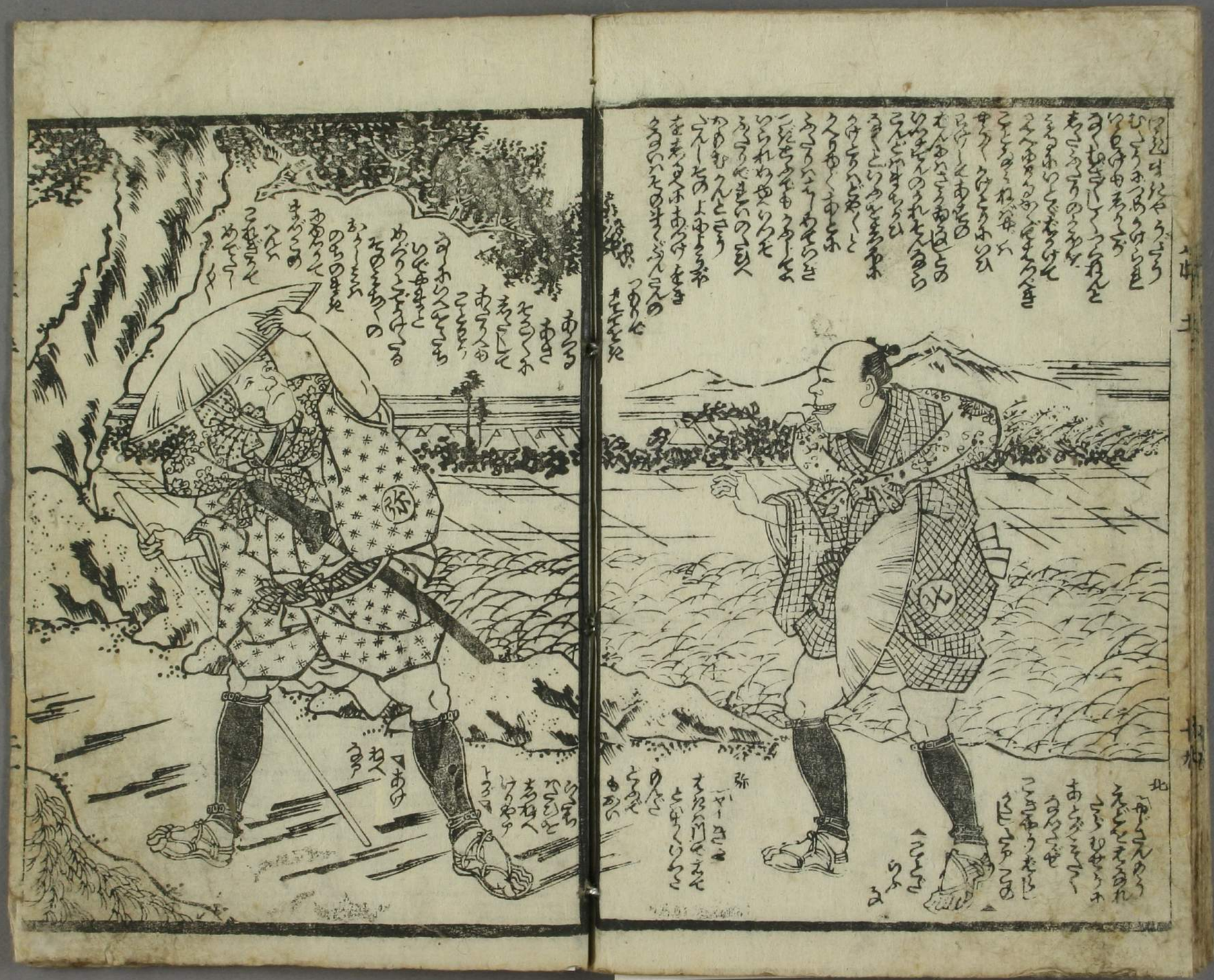
女下

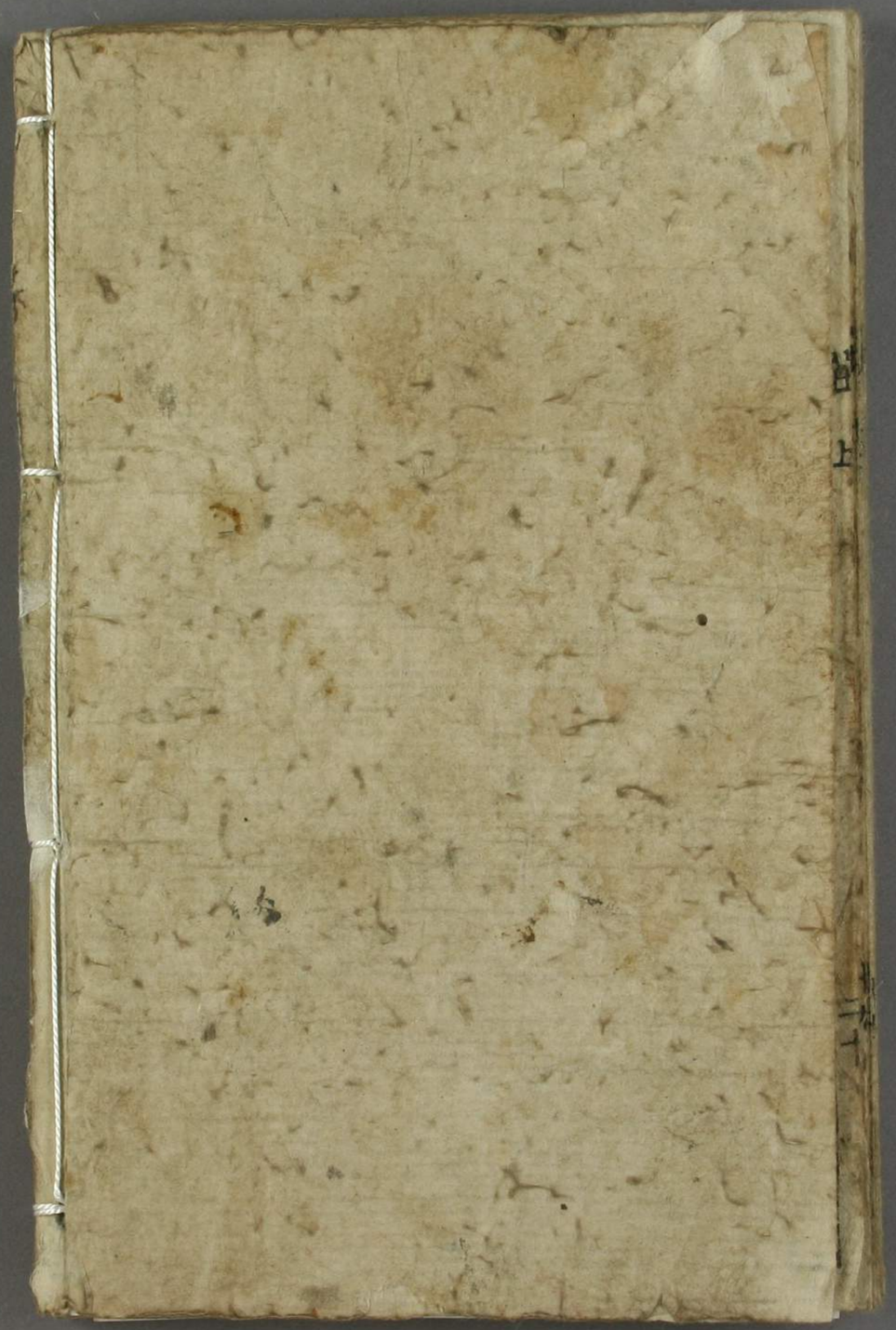
弥
北

童
童

下女
安
北
弥

北
弘



東海堂大河戯作

一松齋芳宗在画